



斎藤玄の晩年

近藤潤一

斎藤玄は六十五歳で世を去ったから、世の常の晩年という印象は多少ともそぐわぬ思いがある。晩年ということばには、なにか天寿を全うした人間の、おのずから寂滅するいのちのそよぎ、というような幽邃な結末感が伴うものではあるまいか。むろん人の生涯には誰しも死期の前に晩年というものはある。しかし、癌死の玄には、晩年とは、非命に斃れざるをえない悽愴な死の自覚として訪れていて、超脱したくてもしきれない死の強制との格闘の時期にかならずぬのであった。だから、斎藤玄の晩年とは、死の予感、死の覚悟、死の仕度のなかで、どのような俳句を拓いていったか、という問題に尽きるといってよい。癌死の場合は、わけても確実な死に対する意識的な精神のふるまいとして、俳句にかかわることになる。そのとき、俳句とは何であり得るか。現に何であったか。

俳句をもって死と直面する、ということでは、玄はすでに昭和二十二年三十三歳のとき、「死の如し」百句の中で試

みている。それについて玄自身は当時「死へ心を動かし、体運ぶことを試みた。」と言い、死という觀念の怖ろしさに「底知れぬ孤独感を抱いては心も体も寸厘動かぬ有様であった」と告白している（『素玄雜筆』へ巻、昭22・12）。その孤絶感、死を主題とした俳句が出来たところで「目が覚めたやうに、そこら一面多彩に光り輝く思ひがし」て、結局安んじて「死に得る事を確信する所へ到着」（同上）して終止符を打った、というふうに語られるのだが、これはかならずしもそのまま鵜呑みにできないと私は判断している。

その点は最近も松崎豊氏が、この作品を「近代的な自意識を以て死という觀念を俳句の領域に持ち込んだのは、玄の大きな功績である」（『斎藤玄・青春の軌跡』へ巻、昭61・5）と再評価しつつも、「フィクションや觀念的遊戯ではない緊迫した臨場感が感じられてならない」（同上）と指摘されるのは炯眼であろうと思う。そのとき玄はおそらく切迫した自殺の衝動に捉えられていた。その原因についてはやがて情況証拠

に関する証言者が出現するかもしれない、当時少年だった私も、間接的に臆測できる程度には伝聞していないわけではない。しかしそんなことは語るに値しないのであって、徹底的に忌避すべき現実への極度の嫌厭感や、迫害・中傷への反抗やらが渦巻いて、死という絶対の逃避に執するという体験に何ほどの意味があるわけでもない。ことにわが内なる決定的罪障感のない人間が、強制された責任感や、その惹き起こす極度の厭世意識で自死に赴くのは、しよせん自己自身への敗北によってである。

玄は強情我慢の人であつたから、自殺の手段を思いめぐらし、死後のことでもまで思案して、いわば想像力の中で自死を遂げ、死の覚悟が成り立つかどうかを見究めようとしたのであつたらう。その思考実験——というより想像力の中での体験を通じて、死への恐怖と遲疑をつきぬけたという自信から反転して、玄はそれ以後も傲然と生きぬいたのである。そのとき、玄の内的体験を支えたものが俳句表現であつたこと、ふたたび松崎豊氏の表現を借りれば「自意識の錯乱の狂気を極限まで凝視」（同上）して、文学的事件たらしめたことに意味があるのであつた。俳句による死の狂気の昇華が、体験として成立する、そこに玄晩年の死闘は、原型をさしのぞかせている。

この構造は、愛憎合一の玄夫人の死に対する鎮魂「クルーケンベルと氏腫瘍と妻」百九十三句でも再現する。これは単なる妻癌死の模様のドキュメントではない。死にゆく妻の奥

に、この女人と自分との宿命を凝視し、俳句のかたちで生涯の魂の葛藤に決着をあたえようとする苦闘の営為であつた。そうしなければ、玄は向後自分が自分として生きられない。妻との半生の俳句による昇華を通じて、玄は再生をはかっているのである。そこで再生した玄の時間は、しかし十二年ほどの、それも半ばは病床に就く残年の歲月であることとなつた。

斎藤玄に晩年感の翳が差してくるのは、六十一歳のとき石川桂郎を喪い、翌年相馬遷子の訃報に接したあたりからであるが、しかしそれは老年孤独の寂寥感にかすかな病変の不安が混入するという程度のものであつたかも知れない。すでに六十歳のとき胆嚢炎で月余の入院生活を経験し、ある医家の推測によれば、そのときすでに癌の兆候が発見された可能性もなくはないとのことであるが、それはあくまでも臆測の域を出ず、真偽の程を確かめる手だても、必要もない。問題は昭和五十三年の直腸癌発症の時以後にかかっている。この年晩冬の頃、札幌の句会に出席した玄が、「このごろ便に鮮血が混入んだが、なんだろう。」と真顔で聴いた瞬間のことを、私は今でも忘れない。ちょうどその頃、私は比較的親昵していたある国文学者の直腸癌による死を身近に経験したばかりであった。むろん即刻、診察をすすめた。玄自身は、当初さまで深刻な事態だとは思っていなかったかと思う。しかし、春から夏へかけての再度の手術を経験し、人工肛門を装着し、夫人がひそかに丸山ワクチンを取り寄せるなどの予後の生活

に入るに及んで、次第に癌の疑懼を深めたごとくである。しかし玄自身は、一切その疑惑を態度に表わさず、平然とわが生命力を誇るごとくであった。この期間の作品が、すなわち『雁道』である。

『雁道』の前半には、

おき去りにさるる心の墓掃除
晩年の不意に親しや秋の暮
冬の日とわれと消ぬべき一呼吸
真冬日を死なずさぶがる鯉も又
たましひの藕となるまで吹雪きけり
裂く鯉の目には涅槃の見ゆる筈

などの、死の仕度に通ずる作品群に事欠かぬが、このあたりまでは、まだ癒える日を心頼みにしつつの死の観想なのであった。

ただ、死は不慮の域にあるとはいふものの、一命を賭けての手術ゆえ、死生相接する時空に心を置いての人の世の観照が、どの作にも宿ることになる。ことに桂郎・遷子の心境を追体験することによって、所詮は喪われてゆく人の必死の営みを哀惜し、はかなさゆえの無形の魂の高貴を思い、純粋に俳句のうちななるわがいのちの顕現にすべてを集中せしめる覚悟が成り立ったのであった。滅びを前提に眺める、この世のものの根源的なやさしさ、恒常的なものの死後にも不渝であるう無慚な真実。わが死のかたちに想いをめぐらせ、今、現

の示した句は、

花 稻 に 身 は う ち 震 ふ 不 信 心

であった。そのときひとしきり話題になった句が「睡りては人をはなる露の中」であり、やがて、〈粗穀と共に世に生れ吹きすさぶ〉や〈雁のゐぬ空には雁の高貴かな〉に始まる雁一連の句が旭川から送られてきた。

玄は不信心者の近代人の自意識を貫いて生きた。その身をもって、ただ花を結ぶ稲の可憐ないのちの営みにも、「うち震ふ」ほどの感動を受ける。それはむしろ、わが死もまた永劫の生命循環過程の一明滅点であることの自覚から生まれる。それは個の命への執着をつきする末期の目が確在することを告げるのである。『雁道』巻末の雁群作は、たまたまおのれを雁に変貌せしめた死の想到であり、いわば晩年における「死の如し」の再現であるのだった。

遺句集『無畔』は紛れもない最晩年の句業である。死の前年と、最後の入院生活の作で一巻が編まれた。ここで何が起こったか。

『無畔』には、すこしく晦渋と見える難解な句が点在している。癌再発の濃い不安と、にもかかわらず生き急ぐ焦躁の影も私には感じられる。その焦躁感とは、『雁道』で死生相接境の発想を果した後の俳境が、いま見えかきつったための焦躁であったように私には思える。

実に安んじて死に得るための精神の訓練を重ねながら、玄は俳句の中にいのちを圧縮して濃厚に生きようとした。その深い思い、切実な思いは、死の観念の群がりをつきするまじりけのない肉声の詩への願いとなっていた。

「詩は肉声であることを。」とは、すでに第三句集『玄』終章に付した題詞である。観念の領域に詩の辺陲を探ることで異端者たることを怖れずに生きたのが玄であった。今、玄は、平明な生きたことばで、精神の深淵を支配する冥々たる真実に一片の夾雑物もさしはさまぬ覚悟をつらぬこうとしていたのである。

花 山 椒 み な 吹 か れ み な か た ち あり
い つ の 日 の 山 と も 知 れ ず 夏 大 空
箒 木 に 一 樹 の か た ち 秋 隣
た だ ぎ ま の 山 の つ ら な り 夏 の 果
雀 ら の 地 べ た を 消 し て 大 暑 あり
秋 や 果 し て む く ろ の 灰 の 幾 野 越 ゆ

などは、そうした境地から詠みだされた作品であった。

しかし玄の最晩年を不可避の死を見詰めた緊迫感でとらえるなら、それは昭和五十三年冬以後の作品と見られる。それは『雁道』終末部から遺句集『無畔』にかけての一年半、玄命終の地となった旭川居住時代だった。予後の玄は、不本意なかたちで勤務を退職、衰えた体力と傷心の慌ただしさの中で、さらに北なる厳寒の旭川へ移転した。その送別句会で玄

鴨 の 声 イ エ ス 泣 か せ て あ る ら む か
何 を 裂 き 何 啖 ひ し や 牡 丹 に 鷹
人 は み な 肉 の 断 崖 青 き 踏 む
ぼ っ ね ん と は じ め は 關 の 水 芭 蕉

などの、改めて人の世の根源に想到してゆく激しい虚無の眼と、にもかかわらず噴湧する歎異心のからみあい、玄に新たな造型の意欲をかき立てていたと見えるのである。たとえば第二句は、牡丹の妖艶は、肉を喰い、血をすすった猛禽類の美しさだと断言し、花影に無形の鷹を幻視しようとする。時間のわたりゆく虚空の眼をもってみれば、野遊びの人間は幾何学的な断崖の形姿に見える。それは「いつ果つる人と並びて鳥頭」や、「草として髪は生ひにき夏の果」の自画像を普遍化した発想である。

入院直前の作で、玄は鶴の一連十二句を発表した。

一 羽 舞 ふ は 一 羽 ほ ろ び の 雪 の 鶴
精 根 の 盡 く る を 舞 ひ ぬ 雪 の 鶴
それは最後のわが死の客体化であった。

はや何を急がす雪の巡礼者
春の雪きらりきらりと眼がありぬ

は、わが死期を自覚し、死をたしなめ、雪片に死後の世界の眼を思う句である。俳句をもって死を打ち据え、安んじて死に得る魂を養い続け、それを文学として形象化することに、玄の晩年は一途にさし向けられていた。